

「自然の森の保全と再生」

第14期自然環境市民大学修了式・公開記念講演会

2017年 3月8日

森山 まり子

一般財団法人 日本熊森協会会長

当協会主催「第14期・自然環境市民大学」修了式（2017.3.8）の後、恒例の公開記念講演会を開催し、一般財団法人「日本熊森協会」会長・森山まり子さんに「自然の森の保全と再生」と題してお話をいただきました。

現在、里山の保全活動・保全運動は日本各地で多く見られますが、クマ等が棲む奥山の自然保護に真っ向から取り組んでいる組織はきわめて少なく、森山さん達の「日本熊森協会」がほとんど唯一のもので、その活動は我々にも多くの示唆を与えてくれると考え、特に講演をお願いしたものです。

この記録は、興味深い豊富な内容の講演の概要を短くとりまとめたものです。

講演の冒頭、1998年11月に兵庫県豊岡市の住宅地に近い地区に初めてツキノワグマが現れ、多くの人々に追いかけまわされた末、猟友会に射殺されたことを報じる当時のテレビニュースが放映されました。

日本熊森協会の活動理念

私たちは現代生態学が出した「森を残し、全生物と共存しなければ人間も生き残れない」という結論に基づき、クマをシンボルに奥山の保全・再生活動に取り組んでいる実践自然保護団体です。

奥山は日本文明を支えてきた水源の森で、多様な動植物によって形成され維持されてきました。私たちはこのような奥山の自然生態系を生き物丸ごと保護することをめざしています。

クマだけの保護団体ではないのに、会の名前に熊を入れた理由は3つです。

- ① 人間活動によって、クマは地球規模で早晚、絶滅の危機にあります。
- ② クマは奥山生態系のアンブレラ種(*)であり、クマの棲む森を残すことにより、動物、植物、さらには土壌中の微生物までを含めた生物の多様性を保全できます。
- ③ クマの棲む森は保水力抜群で、全生物の命、全産業を支える水源の森です。

(*)アンブレラ種：生態系における食物連鎖の頂点に位置する動物で、これらが生存するためには、様々な動植物が豊富に存在しなければならない。

戦後激変した日本の森／荒れる里山、荒れる奥山

大昔の日本列島想像図を見ますと、全島が森におおわれています。その頃はクマをはじめとする森の動物たちの国だったことでしょう。最後に日本列島にやってきたのが人間です。人間は最初、狩猟採集生活を行っていましたが、そのうち平地を覆っていた森を切り開いて田畑とし、農業を始めます。平地から森がどんどん消えていきました。人間は、平地を全て利用しようとしただけでなく、山に残された森も利用しようとしていました。現在

私たちが里山と呼んでいる田畑に接した部分の山の森の木を伐採して、コナラやクヌギなどの有用な樹木を植え、広葉樹の人工林を造っていきました。いったん人の手が加わった里山の自然は、不断に人の手が加わることによってのみ維持される特別な生態系となりました。しかし、戦後のエネルギー革命によって、人の里山への関わりはなくなり、今や里山は大荒廃しています。

一方、奥山は信仰上の理由や江戸時代の厳しい森林保全策もあって、各地で「入らずの森」として保護され、樹木の伐採はもちろん、人間が立ち入ることさえ禁止されてきました。その結果、奥山には、生物の多様性が保たれた巨木の原生的な森が残されました。

ところが、戦後、拡大造林という国策によって奥山にどっと人が入り込み、チェーンソーで森を大規模に皆伐し、代わりに林業として儲かりそうなスギ・ヒノキなどの苗木だけを植えた針葉樹の単一人工林を造っていきました。そして、林業不振に陥った今、その多くが放置され、広大な奥山は内部が砂漠化して大荒廃しています。

クマで説明すると、原生的な森が残っていたころ、春になると多くの広葉樹に花が咲き、柔らかい若葉が出て、豊富な山菜と共に、これらがクマたちの良き食料となっていました。夏には下草に花が咲き多くの昆虫が発生します。クマの夏の食料は昆虫です。秋には食べても食べても、食べきれない量のドングリなどの木の実が実ります。するとクマは朝から晩までこれらの木の実を食べ続けて皮下脂肪を蓄え、数か月間飲まず食わずで冬ごもりをしても大丈夫な体にしていくのです。

また原生林の巨木の幹には、しばしば穴が開いてきます。クマはその暖かい洞（うろ）に入り込んで冬の厳しい寒さをしのぎ、メスの場合は出産も育児もそこで行います。

一方、植林されたスギ・ヒノキの人工林内には動物の食料となるものは何もなく、秋になっても実りがありません。下草がないため、昆虫も発生しません。洞のある巨木がないため、氷点下何十度という厳しい冬の寒さをしのぐ家也没有ありません。

生きられなくなった動物たちが食料を求めて山から出て来ると、平成の日本では「有害獣」というレッテルを張り、今、片端から捕殺しています。

自然保護運動のきっかけ

以前私は、高度に発達した科学技術を用いて地球環境を大破壊し続ける 20 世紀の人類という動物に絶望していました。人類なんか早く滅びた方が地球環境のためになる、そこまで思っていました。

ではなぜ、自然保護に立ち上がるようになったのかということですが、きっかけは 1992 年真冬の 1 月のことです。当時尼崎市の中学校の理科教諭だった私に、生徒が 1 枚の新聞記事を持ってきたことから始まります。そこには、広葉樹林を失い、秋の食い込みができなかったために冬ごもりもできず、真冬に人里に出てきて撃ち殺されたやせこけたツキノワグマの写真がありました。記事には、兵庫県ツキノワグマあと 60 頭、絶滅寸前と書かれていました。理科教師でありながら、奥山や森の動物たちの惨状に全く気付いていなかった私は、大きな衝撃を受けました。

生徒たちはこの新聞記事を見て、「大人達のしていることは絶対に間違っている。先生、ツキノワグマを絶滅から救ってやろうよ」と言い出しました。教師の仕事だけで連日パンク

状態だった私は、「こんな大きな新聞記事になったのだから、きっと誰かが動いてくれるよ」と言って即座に断りました。しかし、動く人はこの国に誰一人いなかったのです。

毎回生徒たちに会うたびにヤイヤイ言われて困ってしまった私は、この問題を終わらせたい一心で、生まれて初めて兵庫県庁に電話をしました。担当者は、「行政は人間のためにある。被害を出す動物は駆除しなければならない。クマ守れなど町の者が勝手なことを言うもんじゃない」と言われました。もともと私は物理が専門で、クマのことなど何も知りません。

本から、クマの本当の姿を知る

ある日、学校の図書室で、「ツキノワグマ日記」という古い本を見つけ、帰りの電車の中で読み始めました。著者の宮澤正義さんは長野市のリンゴ農家の方で、家族とともに自宅の500坪の庭で10頭のツキノワグマと20年間暮らされました。宮澤さんによるとクマは犬（食肉目）のなかまですが、実際に食料としている物は98%が植物で残り2%は昆虫やサワガニなどの小さな生き物です。見かけと違ってクマは大変臆病な動物で、人を襲う習性など全くないということです。性格的には、犬を特別賢く我慢強くしたらクマになるということで、人間から受けた恩は一生忘れない動物だそうです。クマ1頭を仕留めると100万円で売れるため、クマは猟師に追い掛け回されており、そのような体験をしたクマは遠くから人間を察知して逃げます。しかし、うっかり至近距離で人と出会ってしまうと、逃げたい一心で前足で人をはたくななどの行為に出ることがあるということです。

本を読み終えた私は宮澤さんに電話をしました。宮澤さんは、「クマの絶滅を止めようと動いている人など、この国には一人もいない。自分は研究者で、運動を起こす性格ではないが、いつか日本にクマ守れという人が現れたら、自分の数十年間の研究成果のすべてをその人に捧げたいと思っている」と言われました。

悶々と悩んだ日々

この後、わたしは悶々と悩み始めました。私には運動を起こす力などない上、クマ守れという声を上げることによって、天職である教職を失うかもしれません。何日も悩んだ末、逃げられないと観念しました。なぜなら、私は常々生徒たちに、「正しいと思うことがあったら、たった一人でも勇気を出して声を上げるんだよ」と教えていたのです。自分が、見本を示さなければなりません。「ツキノワグマ日記」を読んで本当のことを知って、ここで逃げたら、お前、人間と違うぞと思いました。

クマの保護団体結成

同僚の理科教師2名に新聞記事を見せたところ、これは大変な問題だということになりました。私たち理科教師は授業で、「自然がなければ人間は生きていけない、自然を守るとするのは、生物の多様性を守ることである」と教えていたのです。スギとヒノキだけの広大な奥山はやがて崩壊するということで意見が一致、3人で「野生ツキノワグマを守る会」という会を作りました。生徒たちの方も、校内に次々とクマの保護団体を結成して、全校あげて大運動に発展していきました。

署名集め

地元役場や猟友会に電話をしても、誰も取り合ってくれなかったため、私たちは署名を集めることにしました。私たち教師は署名用紙を尼崎市内の中学校理科教師に送り、70名の賛同を得ました。一方、生徒たちの会の方は、町内を回ったり駅に立ったりして毎日署名をどんどん集めてきます。

私が彼らに、どうしてそこまでがんばるのかたずねると、ある男子生徒が「先生、これ、クマだけの問題違うねん。ぼくら、あと70年ぐらい生きなあかんねん。今の自然破壊を見ていたら、ぼくら、寿命まで生きられへんとはっきり分かるねん。ぼくらは寿命まで生き残りたいねん」と答えました。まさに、中学生の叫びでした。

私は、人間なんか早く滅びた方がいいと言っていたのですが、生徒たちは滅びたくないと言うのです。私は困ってしまいました。この時、もう一人の男子生徒が、とても寂しそうに、「先生、大人って、ほんまはぼくら子供に愛情なんかないんちがうかな。自然も資源も、みんな自分たちの代で使い果たして、ぼくらには何も残そうとしてくれへんな」と言いました。

私は、大人の一人として、彼らの言葉がぐさっと胸に突き刺さりました。実は、今も突き刺さったままです。

この時、私は心のなかで一人ひそかに決意しました。「たとえ、誰がやらなくても、この後の人生、自分一人だけであっても、この子らが生き残れるような自然環境を残すために、とことんがんばろう」って。これが、今日の日本熊森協会会長としての原点です。

署名用紙を兵庫県庁に提出

生徒たちと兵庫県庁に署名を持参しましたが、担当者の方は全く相手にしてくれませんでした。生徒たちが、「人工林を造り過ぎて大変なことになっている。人工林にストップをかけてほしい」と発言すると、担当者は「兵庫県はこれからもっと人工林を造っていいと思っているのに、何をばかなことを言い出すのか」と怒ってしまわれました。

夏休みに生徒の代表が、当時の環境庁に訴えに行きました。係官は、「日本の森や動物を守りたいのですね。ここはそんなことをするところではないので、守りたければ中学生のみなさん、がんばって下さい」と言われました。私たちは、この国には自然を守る団体や自然を守る行政組織がないことを知り、愕然としました。今も、状況は全く同じです。

知事への直訴成功

この年、兵庫県では狩猟と有害駆除で27頭のクマが殺されました。生徒たちは、最後の手段として、当時の兵庫県貝原俊民知事に直訴しました。知事は予想外に理解を示してくださり、「クマは野生で残さない意味がない。私がちょっと乗り出してみようか」と言ってくれました。すぐに予算が付きしました。私たちはその予算で、奥山に実のなる木を植えて、クマが山から出て来なくていいようにしてほしかったのですが、担当者はそういうことは一切やらず、研究者を呼んでクマを次々と捕まえ、発信機をつけてデータを採り始めました。私たちはガッカリしました。

全国植樹会で初めて26種類の広葉樹を植樹

そうこうするうちに、全国植樹祭の2巡目のトップバッターが兵庫県に回ってきました。植樹祭は、戦後、ずっとスギ・ヒノキを植えてきました。計画を見ると、また、わずかに残された雑木林を切ってスギを植える植樹祭です。人工林率が40%を超えるとクマが減びるというのに、兵庫県北部のクマ生息地の人工林率は高率で、ひどいところでは80%を超えています。貝原知事に広葉樹を植えるべきだという手紙を出すと、26種類の広葉樹を植える植樹祭に計画を変えてくださいました。その後の全国植樹祭を見ていくと、どこも広葉樹を植える植樹祭に変わりました。この流れを変えたのは、尼崎の中学生たちです。

両陛下へのお手紙で、兵庫県ツキノワグマ狩猟禁止が実現

この記念すべき植樹祭に私たちも参加させていただきました。式典が終わってから、生徒たちは天皇皇后両陛下にお手紙を書いて、お付きの人に絶対に両陛下に読んでいただきたいとお願いして渡しました。両陛下はその日のうちに読んで下さいました。

この後の当時の環境庁の動きの速かったこと。次の日に臨時職員会議、その翌日に環境庁長官が臨時記者会見を開いて、「兵庫県ツキノワグマ絶滅の恐れに付き狩猟を禁止します」と発表してくださいました。中学生たちが国を動かしたのです。

残された問題は、動物の棲める森復元

狩猟は禁止されましたが、人里に出てきたクマは有害獣駆除と称して1年中撃たれます。この問題を解決するには、奥山に野生動物たちに食料をもたらす広葉樹林を復元するしかありません。5年間、あちこちに頼み続けましたが、どこもやってくれませんでした。

そうしているうちに、教え子たちは大学生となり、自分たちで奥山広葉樹林化をやりうと決意し、1997年に日本熊森協会を立ち上げました。

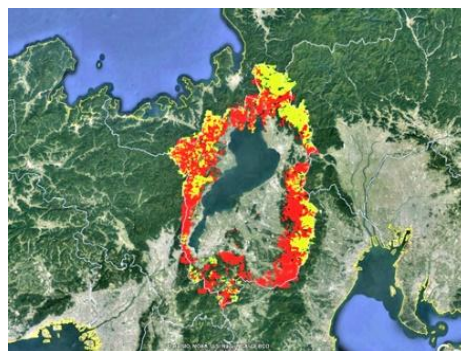
ビデオ上映「日本熊森協会の間伐」

奥山のスギの人工林内で、若い女性を含めた熊森会員たちが、チェンソーや、ノコギリ、スギの皮を全周剥ぐ環状剥皮でスギを間伐している映像が映し出された。

パワーポイント映写「日本熊森協会の活動紹介」

分収造林地の自然林化

滋賀県の人工林(赤)と自然林(黄緑)の分布。1年前に熊森協会は高島市のスギ人工林211haを買収し、自然林にもどしていこうと動いている。

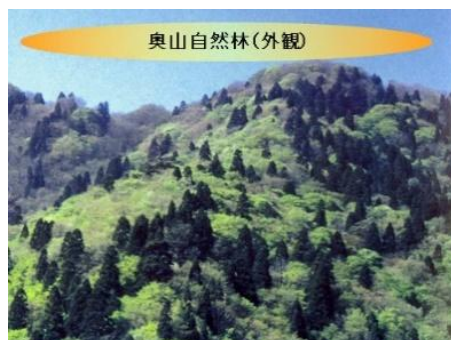


里山と奥山の棲み分け共存

私たちの祖先は、棲み分けることにより、クマ、サル、シカ、イノシシなどの大型野生動物と共存してきた。日本文明は、世界に誇る共存文明である。

奥山自然林

写真は兵庫県にわずかに残った原生的な自然林で、黒く見える木は天然杉の巨木、もこもこしている木はブナ、ミズナラ、トチノキなどの広葉樹である。



落葉広葉樹の葉は日光を通すので林床には下層植生が茂っている。クマは臆病で、自分の姿を隠せる場所にしか棲まない。このような森は生物の多様性が保たれ、1時間に100mmの雨でも簡単に吸収できるほど保水力が高い。森 = 植物 + 動物 + 微生物

奥山人工林

兵庫県の延々と続く奥山放置人工林。外観は緑できれいが、林内は暗く、下層植生もなく、砂漠化している。保水力を失った山の沢は干上がっている。動物は棲めない。



人工林による災害多発

動物の棲めない森は、災害を多発する。台風で木が倒れ、大雨で山が崩れ、押し流された植林木が橋げたにひっかかり、洪水を起こす。



実のなる木を植える

行政は動かない。奥地は過疎化・高齢化しているので、広葉樹の植樹には、都市市民の協力が必要。



この写真の植樹場所は兵庫県の波賀町。スギの人工林を6割間伐して、間に実のなる木を植樹した。2年後、林床には草が生え、昆虫やウサギが帰ってきた。さらに2年後、自然に芽生えたひとり生えの木々が、苗木よりよく育ち始めた。



自然林の再生 —— 植えない森づくり

自然に芽生えた木は、鳥や動物が種子を運んできたり、埋土種子として土の中で何年も休眠していたものが、林床に光が当たり始めたことによって発芽したもので、人が植えた木よりよく育つことがわかってきた。そのため、最近私たちは植樹よりも、「植えない森づくり」に力を入れている。

皮むき間伐

今、日本の山の最大の問題は、木が過密過ぎること。クマが剥皮したスギが枯れていることにヒントを得て、皮むき間伐(=巻き枯らし)を開始した。



沢筋から広葉樹林に

溪流魚は、沢筋の植物の花にやってきた昆虫が川に落ちたものを食料にするが、近年激減している。沢筋にまず花の咲く植物を。



自然林に戻すべきところ／人工林はパッチ状に



自然林に戻すべきところは、①奥山全域、②尾根筋、③山の上1/3、④急斜面、⑤沢筋である。この5つの場所は、代々の林業家を訪ねたとき、御家訓として自然のままに保全すべしとされていた。スギ等を植えるなら、これら以外の場所に。

ナショナル・トラスト

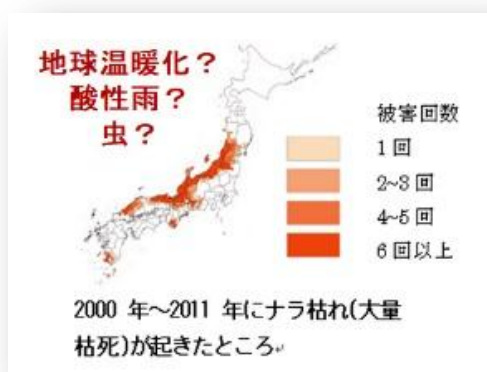
今わずかに残されている原生林こそ開発から守らねばならない。これまでに私たちは、約 2000ha の原生林を購入し保全している。写真は、三重県の宮川源流部の水源林で、全国から寄付金を集めて、670ha を買い取った。(質疑応答参照)



自然林まで荒廃－ナラ枯れ



2005 年あたりから、ナラ枯れの猛威が奥山を襲い始めた。夏にミズナラの巨木が真っ赤になって一気に枯れる。翌年、枯死木は白骨のようになり、やがて、倒れて消える。



ブナはナラ枯れしないが、豊凶が激しい上、年によってはシイナ(＝種は殻だけで中身無し)率が大変高いため、クマはミズナラのドングリに頼って生きてきたが、ナラ枯れで生存の危機に直面している。

ナラ枯れは、被害状況から見て、中国からの酸性雪が原因では、と思われる。(質疑応答参照)



シカの影響

10 年ほど前から自然林内の林床が一気に裸地化しだした。原因説として、シカ、地球温暖化、大気汚染などがある。外観的には良好でも下層植生を失った自然林内では昆虫が激減、虫媒花が実らなくなる。



環境省は狩猟者養成のみ

日本の奥山の惨状に対し、環境庁が取り組んでいるのは、ハンター養成のための「すごいアウトドア!!」キャンペーンのみ。



他生物にも優しい文明だけが生き残る

「他生物にも優しい文明だけが生き残れる」。

人類はどこで道を間違えたのか。人間中心、経済第一、科学技術過信…

(パワーポイント終わり)

2014 年大阪府誤捕獲グマ救命(ビデオ上映)7分

2014 年 6 月、大阪府豊能町で、クマがイノシシ罾に初捕獲された。鳥獣保護管理法に基づき、直ちに放獣しなければならないのだが、大阪府は人身事故を恐れて貰い手を探すことに。熊森協会は、奥山保全トラストが持つ京都の広大な原生林への放獣など様々な提案をしたが、動いてもらえなかった。8 月には貰い手がなかったとして大阪府は殺処分を決定。熊森協会は、豊能町の高代寺に土地を提供してもらい、獣舎を建設し、お寺と共に現在このクマを保護飼育中。みなさん、訪れてクマに親しみ、保護の心を起こしてください。



さいごに

奥山保全・再生は大変な事業なので、林野庁や環境省にやってもらったらいいよとよく言われます。何回もお願いに行きましたがどちらも、絶対に動きません。奥山荒廃を認めると、自分たちの責任問題に発展するからです。利権のない一般国民が声を上げるしかありません。今後は、議員立法で、奥山自然林化を法制化するしかないと考えています。政治家を動かすために必要なのは、主張する国民の「数」だけです。多くの国民が声を上げれば、政治家は次の選挙のことを考えるので無視できなくなります。

ひとりで、「私、あんなことはおかしいと思う」とつぶやいていても、世の中、何も変わりません。みなさん、一緒に声を上げましょう。群れることが必要です。

マザー・テレサは言いました。「愛は言葉ではなく、行動である」。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

質問: 森を買ったりするのにお金がかかると思うが・・・。

答え: 巨額のお金が必要です。一般国民にも寄付を呼びかけますが、日本ではナショナル・トラストに寄付金はあまり集まりません。実質は、森や動物を守りたいと強く願っている当協会の会員たちからの寄附金に頼っています。

三重県宮川源流部の水源林 670ha 買い取りに関しては、購入資金が 9000 万円不足していましたが、「1 人の 9000 万円は無理かもしれないが、1 万円の 9000 人なら可能かも知れない」と寄付を呼びかけたところ、最終的に 1 億円以上の寄付金が集まりました。人口的にも東京都民からの寄付金が一番大きく、2 位は名古屋市がある愛知県民でした。

質問: ナラ枯れについて酸性雨との関係を言われたが、確定された事実か。

答え: 国は虫説です。しかし、虫が入っていないのに枯れたナラもたくさんあります。研究者の中には、大気汚染や地球温暖化など、様々な要因で木が弱ってきたため、最後にカシノナガキクイムシという虫が片づけに入ったと言う人もいます。私は複合的な要因が関係しているのではと思っていますが、自然界のことは人智ではわからないことだらけです。

質問: 在職中、上部からの圧力はなかったか。

答え: 教頭は、バカな運動はやめろとカンカンに怒りました。しかし、校長は、これからこういう活動は大事だから生徒と共にやれと励ましてくれました。

貝原知事に直訴したとき、今日が教職最後の日になるかもしれないと覚悟しました。しかし、知事は「クマは野生で残さねばならない」と、私たちと同じことを言われ、救われました。貝原氏は当協会の顧問として、その後私たちを長くご指導くださいました。これまで活動を続けてこられたのは、こういう人達が応援してくださったことも大きいです。

質問: 全国で奥山の間伐活動などをどの程度されているか。

答え: 全国に支部が 20 位あります。いくつかの支部で、間伐を進めていますが、本部も含めて、民間のボランティア団体のすることなど知れています。私たちは、流れを作ろうとしているだけで、奥山の景色を変えるまでやるには、法整備が必要です。実は、2010 年 11 月に、超党派国会議員 64 名で「奥山水源の森保全・再生議員連盟」を結成することに成功しました。しかし、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災、福島第一原発事故で国会はそれどころではなくなってしまいました。そのうち総選挙で議員が大幅に入れ替わり、議員連盟は消えてしまいました。今またもう一度議員連盟を作り、議員立法をお願いしたいと準備を始めているところです。

質問: 最近山を歩いてシカの害をよく目にするが・・・。

答え: すべて物言えぬシカが悪者にされていますが、元々シカは草原や湿原の動物です。戦後、人間が草原や湿原を農地や宅地にして奪ってしまった経緯があります。また、シカが生息数のバランスを崩したのは拡大造林が原因という説もあります。最奥地の森を皆伐したとき広大な草原が出来、そこでシカが爆発的に増えた。ところが、スギ・ヒノキが大きい

く育ってくると今度は下草が消えた。シカは、整備された林道を縦横に使用して奥山原生林へ移動し、下層植生を食べ尽くし、今、里に出てきたとも言われます。

兵庫県の広大な奥山自然林からササなどの姿を隠せる下層植生が消えたのは、クマにとって致命的です。元々ササは数十年に1度、一斉に開花して枯れます。しかし、地下茎からやがて新しくササが芽吹き再生します。しかし、今は、再生してきた芽をシカに食われてしまうのでササ原が復元できなくなっています。そこだけ見ればシカが森を壊したとなりますが、元をただせばみんな人間が原因を作ったのだらうと思います。